

伝教大師の法華研鑽について

—— 将来目録を中心として ——

桃 井 観 城

一 湛然の法華教学と最澄

法華經の研鑽が我国においてははじめられたのは、上宮法皇の親撰になる法華義疏四巻をもつて嚆矢とすることはいうまでもない。その後白鳳、天平時代にはその信仰は益々たかまり、当代僧尼の必修經典の一つに数えられた。即ち奈良朝には、既に印度撰述の法華部三〇部一二〇余巻が将来せられたのみならず、その註疏が他の教経に対して最も多く、三論宗、法性宗、華嚴宗における法華經研究の三系統が殊に顯著であつた等、恩師石田茂作博士の名著「写經見たる 奈良朝佛教の研究」(1)に詳細にわたつて知ることが出来る。なかんづく、鑑真和尚が我が国へ渡来するにあたり、律に関するものと同時に天台学者であつた彼が、智者の選述を多数伝来し、これを契機として従来漫然と行なわれた法華經の研究が、天台智者を中心とする方向に發展したことは、法華經研究の上に重大な時代を劃したものと考えられている。

かかる時代に現われた最澄が、祖述時代の研究を綜合統一して我国における智者の法華研究を確立すると共に、そ

傳教大師の法華研鑽について

傳教大師の法華研鑽について

れを有力な教団に迄組織し、その信仰と研究を綜合大成して後世に伝えたのは、彼の入唐求法にあづかるところ大であつたのである。

彼は延暦二二年（八〇三）天台学求法の還学生として出帆し同二四年（八〇五）帰朝に至る在唐一年有餘、道邃に
 一宗の玄旨、止觀を、行滿に天台教學を、順晁に真言の秘法を恊然に牛頭山の禪法を伝えうけ、彼の「將來目錄」に
 よるとこの短日月に「所獲經并疏及記等、總二百三十部四百六十卷」の多きを得て我國に帰朝した。その内容は広く
 仏教全般に互り、平安、鎌倉兩時代に、日本仏教が興隆する基となつた。特に法華經に關するものや天台學に關する
 大部の經疏を携え歸つたことは重視せられるべきである。

さらに、奈良時代に鑑真等によつて傳來した法華經及び天台學に關するものを再び重ねて持ち歸つたことは興味深いものである(2)。今それ等を列記すると

七卷法華經	七	(勝宝五)	(大日本古文书 479/12)
法華玄義 智顛	一〇	(勝宝二)	(47 11)
天台文句	一〇	(6)	(全 120 113)
天台止觀法門	一〇	(6)	(6)
小止觀	一〇	(勝宝六)	(全 120 113)
四教義	一二	(6)	(6)

これ等はそれぞれ勝宝年間に既に我が國にあるにもかかわらず、所謂天台の三大部を彼が重伝していることは、鑑
 真所藏の天台三大部とあわせて、当時の法華經研究のあり方が、天台智者中心にかたまりつつあつた趨勢を物語るも

のでこの外に智者の撰述として奈良時代に

修習止観坐禅法要 智者一

略明開脈初学坐禅止観要門 智者三

六妙法門 智者一

次第禅門 智者一〇

大乘止観論 顓禅師一

等が伝わっている(3)。これ等は天台智者の禅法を明にしたもので、前掲の摩訶止観は天台独自の禅法を解説して余りあり、他はその部分的説明で、「次第禅門」のみは南岳慧思の思想を祖述したものにすぎない。

これによつて奈良時代の法華経研究と彼の天台学の造詣は右の経疏に出るものではなく、この基礎の上に立つて、天台学求法の還学生として彼の入唐が実現し、やがて新しい法華研究の素材が多数将来せられ、日本天台の基が開かれた。今試みに彼によつて我国に初めて伝えられたものを見ると延暦二四年に

妙法蓮華経玄義 荆溪一〇(伝教大師全集第4 351)

妙法蓮華文句疏記 〃 一〇(〃 〃)

妙法蓮華経観音品義 智者一〇(〃 〃)

妙法蓮華経観音品義疏 智者二(伝教大師全集第4 351)

妙法蓮華経科文 左溪 二(〃 〃)

妙法蓮華経観音品偈科文 一(〃 〃 352)

傳教大師の法華研鑽について

傳教大師の法華研鑽について

妙法蓮經大意	荆溪明曠 <small>一</small>	<small>(傳教大師全集第4)</small>	352
妙法蓮華經文句序	神廻	<small>一</small>	〃
妙法蓮華經懺法 <small>或名三昧行法</small>	智者出	<small>一</small>	〃
妙法蓮華經三昧補助儀	荆溪	<small>一</small>	〃
妙法蓮華經大意		<small>一</small>	〃
妙法蓮華經玄義科文		<small>一</small>	〃
妙法蓮華經文句疏科文		<small>一</small>	〃

右の一三部四二卷が本邦に初めて伝つた。その撰述者の左溪、荆溪、明曠等は一連の法脈で左溪玄朗は六祖荆溪湛然の師であり、明曠は荆溪の門下である。道邃、行滿によつて伝法を受けた伝教大師最澄がその法脈を遡ぼる時、支那天台学の中興である荆溪の教学を鑽仰し、これ等を将来するに至つたものと考ええる。更に同時に初伝されたものうちに、

摩訶止観補行伝弘決	荆溪	<small>一〇</small>	<small>(傳教大師全集第4)</small>	352
摩訶止観文句	〃	<small>二</small>	〃	353
摩訶止観義例	〃	<small>二</small>	〃	〃
摩訶止観心要	〃	<small>一</small>	〃	〃
摩訶止観音	〃	<small>一</small>	〃	〃
摩訶止観略音	〃	<small>一</small>	〃	〃

摩訶止観大意 荆溪 一(仏教大師全集第4 353)

摩訶止観八教大意 明曠 一(〃〃〃)

摩訶止観科文 一(〃〃〃)

摩訶止観三徳図 一(〃〃〃)

これらの止観法門は今更いうまでもなく、天台智者創設の法門にして、章安これを筆受編輯し、荆溪に至りて解明されたもので、その荆溪の論著を最澄が本邦に傳來したことは、奈良の天台学が荆溪以前の原始的な形態を具へてゐるに過ぎなかつたのに対し止観中心の新思想を提げて立つに至つた所以を知るのである。即ち奈良時代の止観法門に
関しては

止観法門 惠思一 (天平一八) (大日本古文书 149)

天台止観法門(止観) 智顛一〇 (勝寶六) (東征傳)

略明開蒙初学坐禅止観要門 〃 一〇 (天平一六) (大日本古文书 5368)

次第禅門 一一 (勝寶六) (東征傳)

六妙門 一 (勝寶二) (大日本古文书 26111)

大乘止観論 顛禅師一 (勝寶三) (〃〃〃) 56611

止観文 八 (勝寶七) (〃〃〃) 6159

行法花法 一 (勝寶六) (東征傳)

大乘止観論 遷禅師一 (勝寶三) (大日本古文书 56611)

傳教大師の法華研鑽について

止観行門論 一 (宝亀三) (大日本古文书) 54/20

大乘観行門 元曉三 (天平二〇) (〃) 88/3

大乘観行問答 一 (天平二〇) (〃) 87/3

等により、観心法門は天平、勝宝の頃に既に伝わっていたことを知るが、その奥義は最澄が荆溪のそれを齎らすにいたり確然たるものを得それ以後叡山仏教の特色がここに存した事を知るのである。

尚荆溪湛然のものとしてこの他に、金牌論一卷 受菩薩戒文一卷、十不二門義一卷 等のほか観誦経記一卷、方等懺補闕儀一卷維摩経疏三卷 同略疏一〇卷 聖四十二賢聖儀一卷 涅槃後分科文一卷 学意三昧文句一卷 大般涅槃経疏一五卷 華嚴経骨目一卷 天台大師誦経観記一卷とただに法華、天台学のみならず各般にわたる妙楽大師の経疏記その他が将来せられたことは(5)、湛然の教学研究が如何に深く広い基盤の上に進められたかを知ると共にそれが天台智者の教学の上に立つてなされたことはいうまでもない。即ち智者のもので当時初伝されたものが、前出法華部の三部一三卷の外に禅門部に八部一七卷 維摩部に二部七卷 雜疏部に七部一〇卷を教え、さらに、天台学関係に釈十如是義一卷 釈一切経玄義一卷 七学人義一卷 七方便義一卷 三観義一科 釈二十五三昧義一科 四種三昧義一科 四種四諦義一科 七種二諦義一科 三諦義一科 四門義一科 四土義一科 四不生義一科 四悉檀義一科 十法界義一科 十法成乘義一科 請観音三昧行法一卷 方等三昧法一卷等を最澄の将来目録(6)中に見るは、当時法華、天台学の研鑽資料が殆んど整備せられ彼れ以後の将来をまつまでもなかつたことを知るのである。

かくして、奈良時代既に法華三大部によつて法華一部の宗教哲学と仏教概論を究明した我国の法華経研鑽は、更に進んで平安初期荆溪湛然の三大部の註釈を得て、天台の本旨を解明すると共に法華経の法華経たる所以を闡明し、伝

教大師最澄による天台法華宗の独立を見たのである。最澄が荆溪のものを初めて將來したことにより、本邦に天台智者の超八醍醐、本迹論、一念三千、円融三諦の教義が明示され、或は十不二門を論じて二十妙を哲學的に概説したのみならず、三種の止観、事理の二観を分類し、更に「起信論」の縁起論的思想を取り入れて、智者の本意が解明され(7)、これがやがて最澄により天台や湛然にも説き出されなかつた三種法華が分明され(8)、次いで伝教大師の日本天台が比叡山に立教開宗されるに至つた所以と考えるのである。

二 台密の母胎としての最澄

最澄による天台法華宗は前述の如く開宗独立したが、その教的内容は彼が入唐して円、禪、戒、密の四宗を相伝したことに依り、叡山の教学が単一ではないことを知ると共に、在唐僅か一年余の彼が如何に頭腦明晰であつたとしても、そのすべてを体得したとは考えられない。然し入唐以前「大日経疏」を読み(9)、中国において順曉より密教三部の灌頂を伝法し、「学生式」において一人を止観業、他の一人を遮那業と制定し、遮那業において「歳歳毎日遮那孔雀 不空 仏頂の諸真言護国真言の長念」を定めた彼が、空海の帰朝を見逃がす筈がない。空海は最澄の入唐と前後して渡航、在唐すること二年、その間専ら秘密教の研究と灌頂を恵果より直伝し、多数の典籍を齎らして大同一年(八〇六)帰朝した。時に空海は三三才新進氣鋭の英才で最澄より七才も若い留學生中のホープであつたであらう。

大同四年(八〇九)この二人の会合が叡山で始まつて以来、最澄は空海の「請来目録」を通覧して密教の秘書珍籍の借覽書写を請うこと一再ならず金胎兩部の灌頂をも空海より受けている。今その借覽した経疏中より空海が我が国

傳教大師の法華研鑽について

傳教大師の法華研鑽について

に初伝したものを挙げると(10)

十一面觀自在儀軌 一

大虚空藏菩薩所問經 不空八四

虚空藏經疏 潛真四下

金剛頂瑜伽五秘密修行儀軌 不空一

成就妙法蓮華經王瑜伽觀音儀軌 不空一

文珠讚法身礼 不空一

守護国界主陀界尼經 般若一〇

華嚴經疏 澄觀三〇(一〇)

大威怒烏枢薊湿摩儀軌 不空一

悉曇字記一

梵字悉曇章一

悉曇積一

貞元新定釈経目錄 円照三〇

等を教える。その内に不空の訳述を見るが不空は惠果の師にあたり、空海が不空の選述を一一〇部の多きにわたつて新しく将来していることは、恰も最澄が荆溪の天台学を伝えて法華研究の中核を得たと同様、空海により平安朝における密教の在り方を示すものである。即ち空海初伝の一九七部の経疏中には旧訳密教の経疏と共に善無畏、一行、

無能勝、不空 円照 良貴 勿提犀魚 尸羅達摩 般若等の新訳密教が大部分を占めているのは、空海の入唐が新訳密教の求法であつたことを物語るものである。もとより不空の訳経は奈良時代に左の五部六巻を伝えているから最澄もこれを知らぬ筈わない(11)。

金剛頂經一	(天平八)	(大日本古 文書)	57
仁王護国般若一	(〃九)	(〃)	67
摩利支天經一	(〃)	(〃)	80
金剛壽命經一	(天平一九)	(〃)	343
大雲請雨經二	(〃)	(〃)	446

最澄伝法の師、順晁の秘密教が不空の系列にあるからには、空海が将来した不空の記述が最澄の関心をあつめ、それを借用し、書写するのは当然である。なかんずく不空の「成就妙法蓮華經王瑜伽觀音儀軌」一卷は、佛陀の甚深微妙の法を大日の成道法によつて示さんとするもので、即ち真言行に依らなければ如何ほど妙法蓮華經王を修するとも益なく、供養恭敬の事相儀軌を具えて法華三昧を成就すれば、速やかに無上菩提を成ずるのであつて、これ法華を密教の一方便(12)とする教に過ぎないというのが四宗相伝を眼目する最澄にあつて、この一儀軌を觀過することは出来なかつたのである。

最澄が秘密教に深い造詣と関心をもつてこれを伝法したとはいへ、彼が宗としたところは、「血脈譜」に「天台法華宗師々相承血脈譜」とあるが如く天台法華宗にあることは明らかである。従つて止觀、真言の内には遮那業を法華宗の傍依經として又護国の方便として用いられたことを「学生式」「顕戒論」等によつて推察するが、法華經と大日

經との優劣については弘仁七年（八一六）一月泰範に与えた書に「然、法華一乘、真言一乘、何有優劣」とあるをもつて兩經を同一視されたとするは余りにも早計である。この書は最澄の高弟泰範が空海の下にあること五年、比叡に帰山する意志なきや否やを案じつつその帰山を促がさんとされた書翰である。従つて兩經に対する最澄の本意をこれにつて決定はできない。又一步を進めて「顕戒論」の大悲示現大日尊の論旨をもつてしても容易に断定できないのではないか(13)。

最澄が順眺より伝受したという秘密教三部の灌頂は文字通りにうけとつて然るべきであろうか。古來この三部については台密、東密の間に確執あり、台密では蘇悉地の大法と金胎兩部の秘法とは車の兩輪の如しとしてこれを秘惜し、兩部に蘇悉地を加えて三部とすることは台密独特の教説である。これに対し東密では金剛頂經大日經の兩經を正所依の經典として外に蘇悉地の法を立てず、空海これを將來するも胎藏の所撰としていたのである。また兩部は多法界一法界を標したるもので不二門に非ず、兩部の不二を説くは蘇悉地經の一經に限るとしてこれを最も重じ、灌頂にも蘇悉地灌頂を立て、經軌にも蘇悉地法の一門を分類するを台密の特色とするのであるが、最澄の蘇悉地に対する態度を明かにすることは今のところ出来ない(14)。僅かに「請來目錄」と三部灌頂、「内証血脈譜」の三種真言、顕戒論の一期籠山の証として蘇悉地經を見るに過ぎない。然しいずれにしても最澄の教学中に蘇悉地の大法の存在したことは、彼が奈良時代の天平九年（七三七）に用いられた蘇悉地羯羅經を延暦二四年（八〇五）重ねて我が國に伝えたことに徴しても明かである。「顕戒論縁起」に三種印明は金胎二部の根本蘇悉地の玄元にして大師始めてこれを相伝したりとあるは、この辺の消息を物語るものであらう。

次に「顕戒論縁起」において最澄が三部三昧耶を順眺より伝法しその三種の陀羅尼について尊勝法根本印明とも、

蘇悉地三種の密部ともいわれているが、彼が新訳梵漢兩字大仏頂陀羅尼一卷 梵漢兩字隨求即得陀羅尼一卷 同仏頂尊勝陀羅尼一卷 同千臂陀羅尼一卷 同千手陀羅尼一卷 同一字呪王陀羅尼一卷 同文珠師利五字陀羅尼一卷 等を初伝したと合せ勘うべきである。その後安然が彼の「対受記」に最澄は「陀羅尼」は伝えたが、印象の相伝はななく、三部三昧耶は金、胎、蘇の三部に非ずし、最澄の立場よりすればそれは大日経の仏、蓮、金の三部なりとする説は大いに吟味すべきであろう(15)。

更に及印信の文に表われた付法相承も「内証血脉譜」と対比するに胎藏と一致するも金剛と差異あるを考える時、伝教大師の密教はその教相上寧ろ胎藏のみを相伝したものである(16)、経疏伝来の観点より見ると、最澄は胎藏部の経疏を一部も将来せず、むしろ金剛を三部と蘇悉地部を一部伝来していることは(17)、最澄が密教を如何に撰取して、天台法華宗の教学を構成していたかを知る一課題である。或は最澄の相伝を胎藏の一法としてその智識は「大毘盧遮那成仏経疏」の教相にとどまるをもつて、実相を正とし三密の事を傍として円、密、禅、戒を一団とし法華経を中心とした天台法華宗の存立を説くとも、所謂「大日経疏」二〇卷は当時未だ我国に伝わらず、その将来は天安二年(八五八)円珍智証大師によつて初めて伝えられたのであるから、伝教大師の顕密二教に対する確然たるものは新しい角度よりこれを研討すべきである。ことに弘仁四年(八一三)最澄が「般若理趣积経」一卷を空海より借覧せんとした頃より両大師は疎遠となり、我が国での密教伝法の道は遂に塞がれ、比叡を中心とする台密の完備は、円仁慈覚大師の入唐求法の日まで待つのであつたのである。即ち叡山の教学は円仁によつて大成せられ、更に円珍の時に及んで興隆したのであつて、最澄の止観、遮那の二業は、顕教と密教として建立され、法華経中心と大日経中心の教学として発展し、台密の全盛期を劃するのである。

尚お弘法大師が初めて伝えた澄観の「華嚴經疏」一〇巻を借覧しているがこれは鑑真和尚以来天台教学が華嚴学と深い関係にあつたためである。その華嚴学とは奈良朝以来の新羅系の華嚴であつたが、新羅朝の空海が澄観（天台三論学者）の華嚴經疏三〇巻を齎らしたのでそれを請い求めたのであろう。古く天台教学の本門思想が、南都の華嚴思想の中に萌え伝教 慈覚 智証の三聖を経て台密の母胎に入り發育したというが（18）、これは今後の研究課題である。

更に空海が伝えた天台文句と文句記をこれまた借入していることは、おそらく最澄が自ら所持したものと対照するための証本としたのではなからうか（19）。これによつて空海の蔵書の豊富さを知るのである。

三 伝教大師の法華研鑽

以上伝教大師の将来経疏を中心として大師の法華教学をほぼ紹介し終つた。これを通覧するに奈良時代の法華研究は華嚴宗における天台大師の法華研究にその独自の發展を見たが、伝教大師の入唐求法により妙楽大師湛然の法華研究が初めて我が国に伝来し、これを契機として法華研究が集大成せられ、遂に智者や荆溪にも見出されなかつた約部釈に立つ所謂三種法華が説き出されるに至つたのである。

また奈良時代に真言の三部経はもとより一九三部（20）の多きを数える密教経典が伝来し、その内には古密、新密の両密を見、わけても古密は殆んど完全に伝わつていたが、新密は未だその一部を伝えていたに過ぎなかつた。ここに弘法大師入唐の目的があり果して一九七部に及ぶ密教経疏を新たに伝えたのである。早くより秘密教に関心を持ちことに三部の灌頂を順眺和上に伝受している最澄が、日本佛敎界にも密教時代の来れるを関知せないことはなかつた

であろう。即ちすでに修得した秘密教を基として蘇悉地を金胎両部不二の經典とする台密の素地が彼によつて培われ、やがて慈覺大師円仁の智度論による顕劣密勝論と、智証大師円珍の五教判による円劣密勝論となつて台密の隆盛時代を迎えることになるのである。

(未完)

1 資料

最澄録 伝教大師將來目錄

(伝教大師全集)
叡山学大学院編
第四卷 三四九—三八四

空海録 御請來目錄

(弘法大師全集)
祖風宣揚師会
第一輯 六九—一〇四

石田茂作編 奈良朝現在一切經疏目錄

(東洋文庫論叢一一附録)

2 参考書

〔石田茂作著 写経より奈良朝仏教の研究
見たる〕

(東洋文庫論叢一一)

島地大等著 天台教学史

(明治書院版)

〃 日本仏教教学史

()

三浦周行編 伝教大師伝

(延暦寺遠忌局版)

梶尾祥雲著 秘密仏教史

(高野山大学版)

山川智応著 法華思想史上の日蓮聖人

(新潮社版)

菊谷日任編述 法華宗教義綱要

(法華宗宗務院)

望月信亨編 仏教大辞典

(仏教大辞典発行所)

傳教大師の法華研鑽について

3 註

- (1) 石田茂作著 「写経より見たる奈良朝仏教の研究」 一三六―一四六頁参照
(以下奈良朝仏教と略記)
- (2) 石田茂作編 「奈良朝現在一切経疏目録」
三一、一〇八、一三五、一三六頁所載
- (3) (奈良朝仏教)
一四〇頁所載
(以下奈良経録と略記)
- (4) (奈良経録)
一三五、一三六頁所載
- (5) 最澄編 「将来目録」 仏教大師全集第四卷
三五五―三七五頁所載
- (6) 〃 〃 〃
三六一―二六三頁所載
- (7) 山川智応著 「法華思想史上の日蓮聖人」
二六五―二九〇頁参照
(以下法華思想史と略記)
- (8) 〃 (法華思想史)
三四九―三六二頁参照
- (9) 島地大等著 「天台教学史」
二六〇―二六六頁参照
(以下天台学と略記)
- (10) 三浦周行著 「伝教大師伝」
一七三―一八四頁所載
(以下大師伝と略記)
- (11) (奈良経録)
八一、八二、八三、八五頁所載
- (12) (法華思想史)
三二四―三三一頁参照

- (13) (法華思想史) 三六二頁参照
- (14) (天台学) 〃
- (15) (天台学) 二六二—二六三頁参照
- (16) (天台学) 〃
- (17) 安 然編 「八家秘録」 大日本仏教全書第二卷
- (18) 烏地大等著 「日本仏教教学史」 一二〇—一二六頁参照
- (19) 「仏教大師伝」 一八一頁参照
- (20) (奈良仏教) 一四七頁参照

(終)

尚ほ伝教大師「将来経疏目録」の交渉については立正史学第三十八号の拙編を参照されたい。

此の小論は昭和三十九年三月刊行の「立正史学」第三十八号に発表せるものを、本人の希望にて掲載するものであります。

傳教大師の法華研鑽について